

ふるさと元気新聞

エターンとUターンの実際とは？

いなか暮らし塾より

朝来市で体験民宿などを行う「いなか暮らし塾」。ここは様々なエターン、Uターン経験者が集う場所だ。今回、何人かの方にエターン、Uターンの実際についてお話をうかがった。

田舎暮らしをコーディネート

朝来市で「いなか暮らし塾」を主宰する西垣憲志さん。都市部で

教員をしていたが、但馬にUターン後、平成10年に早期退職し、小さなデザイン事務所を開いた。しばらくした頃、但馬長寿の郷で絵手紙教室などを指導することになり、ここでエターンの人たちと知り合い、都会から但馬に来てくれる人が多いことに驚いた。「多士済々の人たちがばかりで刺激を受けた」と西垣さんは語る。その後も長寿の郷の田舎暮らし

しセミナーの中で、自然の中での遊びや里山の楽しみかた等を指導していたある日のこと。ある人から移住にあたり物件を紹介してほしいとの相談を受けた。「空き家はあるが貸してもらえない。西垣さんにお願ひするしかない」とのことだった。

空き家を借りるのは、最終的には借りる人と家の持ち主との話し合い。行政は物件情報を出す、最後まで面倒を見るには限界がある。ならば、民間のビジネスとしてコーディネートを行うことはできないか。一昨年、同級生のAさんに話を持ちかけた。

そこに、地域で増え続ける放棄田を何とかしたいと考えていた松田さんが加わった。松田さんは

専業農家の後継者で人を呼び込むことで地域の活性化につながることを考えていた。

3人は松田さんの地元である多々良木を拠点に共同でいなか暮らし塾をつくり、体験民宿や空き家のコーディネートに乗り出した。資金的には苦しいが、県や経済産業省の補助金を受ける芽も出てきている。

空き家を探している人がそんなにいるのかという疑問の声もあった。だが、現在3〜4家族から空き家や土地のコーディネートを依頼されているという。「反応は出ている」と西垣さんはいう。「これまでに移住してきた先達の体験を生かしながら、官と民が知恵を出しあえば」必ず成果が出

ると考えている。

西垣さんは神戸新聞の記者から言われた「但馬の人は『何もなところですが』とよく言っが、そんなことはない。皆良いところに気付いていないだけ」という言葉が忘れられない。だから少しでも但馬の良さを情報として発信していきたいと考えているのだ。

西垣さんは、団塊の世代に対して商魂たくましく田舎暮らしをばら色に描く都市部の一部業者の動きには警鐘を鳴らす。「近くでは都市の業者が温泉付の分譲地を開発し、地域との関係などお構いなしに人を呼び込もうとしている。団塊の世代の人たちが大挙して田舎にやってきたら10年

後、田舎はお年寄りばかりになってしまう。今でも介護の問題は深刻だ。団塊世代に田舎暮らしを単純にビジネスとして仕掛けた人たちは無責任で期待できない」という。西垣さんは、将来は福祉事業も視野に入れた展開が必要で、介護にも対応できるようにしなければと今後の展望を語る。



いなか暮らし塾について語る西垣さん

自然が好きで但東町へ

神戸市北区から旧但東町に移住して丸6年になるという中谷さんご夫妻。移住した理由は、「自然が好きだった。会社がきつかったので退職後はのんびりしたかった」からだ。

老後のことを考え、病院、買い物、役場などの公的機関へのアクセスなどを考慮し、但東町が宅地開発した分譲地を移住先に選んだという。

以前住んでいたところは昭和50年前後に整備された団地。高齢化が進み、働いている人は仕事に疲れ、人と人の繋がりは希薄だったという。集落では、都会に比べ人と人の繋がりが強いと感じ

るという。「決まりごとをきちんと守れば、皆良い人だし、散歩している」と黒豆を持って行けと言われることも」という。

今では、住んでいる地区で、村の元気づくりを検討する活性化委員会で副委員長をつとめる。何十年も住んでいる住民の人たちを差し置いてはできないと断ったが、村の問題を外から来た人の目で評価してほしいと言われ、引き受けた。

一方、奥さんは、「実は嫌々移住した」と明かす。神戸で生まれた育った。親、きょうだい、友達みな神戸に住む。まるで世捨て人のような気持ちで但東町にやってきたという。だが、いろいろな活



動を通じて人と巡り会い、但馬の自然にも触れ、今では「こんな良いところはない」という。
老人ホームでボランティアとしてお年寄りのお世話をしている。「今の自然があるのはお年寄りの人たちが大切に守ってきたくれたおかげ」と思うという。

雪の中ひっそり建ついなか暮らし塾

田舎暮らしの夢を叶える

平成12年、京都から日高町東河内に移住した大野さんご夫妻。ご主人は会社にいる頃から、会社の若い人たちがいつでも遊びに来られる場所をつくりたいと考えており、「みんなの田舎をつかってやる」と広言していたという。本格的に移住場所を探したのは50歳を過ぎてから。遊びに来た人が退屈しない場所で、京都周辺に住む親戚が2〜3時間で来られる場所。会社の親睦旅行で訪れた神鍋はそうした条件に合った。その後、奥さんと二人で何回か訪れ、日照時間など季節の特徴を調べた上で決め、家を建てたという。

だが、ご主人は広島に転勤。奥

さんだけが先にその家で生活することに。挨拶回りに行った時、「雪の生活は大変ですよ」と言われ驚いたという。「実際生活してみると大変だった」と一人で過ごした冬のことを振り返る。

ご夫妻の住む隣保は、10軒のうち7軒がペンションを経営。経営するのは外からの人ばかり。「村の中で生活しているとはいえない」とも。

一方で、「こっちから何か聞くといろいろ積極的に教えてくれる」という。特に、お年寄りが持っている知恵や経験は貴重。するめの麹づけの作り方など今の人は知らないことを知っている。「お年よりは心の中にお宝を持っている。地元にあった生活の知

恵を持ち、後進の若いものには傾聴に値する」というのだ。

今はご夫婦で「陽気塾」を主宰し、そこには様々な人が集うという。「自分の好きなことをする。来るものは拒まず、楽しく暮らす。今では海外からのホームステイも受け入れている。この間はニユージーランドの子が泊まりに来た」とか。

奥さんは、「主人は結婚してしばらくの間、『将来は田舎暮らしをする』とずっと言っていた。そのときはあまり本気にしていなかったが、夢は言い続けると叶えられるのかなあと実感している」という。

「犬を飼ってはいけない」集落で犬を飼う

旧日高町に住む佐藤さんは宝塚からのエターン。田舎暮らしをしたかったとき、たまたま不動産屋に今住んでいる物件を紹介してもらい、移住。現在、古民家を改修して住まいを使い夫婦で料理屋を営む。

予約制で、営業は月に10日程度。料理は凝ったものではなく、田舎の料理を出した方が喜ばれるという。働いているとき以外はアウトドア生活を楽しんでいる。

佐藤さんが最初に集落に来て驚いたのは「犬を飼ってはいけない」という村の風習。犬を飼うと

不幸があるという言い伝えがあり、犬を飼う家はなかった。2年ほどで、我慢しきれず柴犬を購入。散歩させていると村の人は異様な目で見える。「それどうしたんですか」と聞かれると、「知り合いから預かってるんです」と誤魔化したという。

「とうとう預かっている期間が8年になってしまった」。ところが、佐藤さんが犬を飼うと、村の人たちも「飼っても大丈夫だ」と思ったのか、犬を飼い始めたという。「実は皆犬を飼いたかったようで、今では8軒も犬を飼っている」とのことだ。

田舎では人と人の付き合いが濃い。野菜ができたら持って行ってと言われ、洗濯物を取り込んで



いなか暮らし塾には様々な人が集う

くれることもしばしば。

「最初は料理に使う野菜を自分でつくっていたが獣害の対応に追われてしまつてやめた。近所の人を持つてきてくれる分もあるので自分で無理につくる必要もない」とご近所との関係の大切さを語る。

故郷で集落の活性化に奔走

生野町在住の竹村さんはウタイン組。大阪で働いていたが、都会は「土がない。水がおいしくない。空が見えない」ため戻った。

築約100年の生家を改修。「13軒しかなく、大半がお年寄り」の集落を活性化しようと、仲間と夏祭りを復活。じゃがいも饅頭の開発などを手がけるが、中心は70代。「年々しんどくなって」いる。

廃校の黒川小中学校に「あんこうミュージアム」をつくらうと2年前から活動している。既にあるこう(オオサンショウウオ)研究の権威である栃本武良氏が所長をつとめる。「日本ハンザキ研究所」が研究拠点として設置されている。

但馬各地を見て回ったが、「黒川が一番」との思いを新たにした。その故郷を活性化したいという思いがこぎつけた活動につながっている。「黒川では1/4が空き家。10年経てば家がなくなるのでは」と危機感を募らせる。

集落を再生するには、「出て行った人に帰ってきてもらうばかりではなく、エターンを」と考える。エターンによる移住者を増やすには、情報発信と集落側の受け入れ体制の整備が必要だという。

外部の人間を受け入れるに当たり集落の古い慣習に戸惑うことも。自身、生活上はすんなり溶け込めていたが、10年経たないと村の共有財産を分配される権

利を獲得できないという不文律を知らされて驚いたという。

神戸の専門学校が集落の広場に宿泊用のテントを張るという話に対し、集落側は難色を示した。「広場を貸すことで集落には収入が入る。さらに子供らが無償で草刈りをしてくれる。損はないのだが、自分たちの土地を貸すことには抵抗が強い」と竹村さん。

実は、契約書の締結など事務的な手続を集落ですることが困難に感じたり、相手との信頼関係を作るのに時間をかけたいなどが理由のようだ。協議会などが仲立ちをして、ワンクッションおいてやると意外にスムーズに話がまとまるという。

竹村さんの取組が実を結ぶことを期待したい。